

トルコ共和国におけるブルーノ・タウト

北村 昌史

ドイツの建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）は、1933年のナチス政権成立をきっかけに日本に亡命したのち1936年からトルコに亡命先を転じ、そこで客死した。1936年11月10日にトルコに到着し、1938年12月24日に亡くなるまで、実質的な活動期間は2年強に過ぎない。それにもかかわらず、日本文化論の著作の執筆や工芸の指導だけで、建築家としての仕事はほとんどなく「建築家の休日」と自嘲していた日本滞在時に比べると、トルコ時代は建築家としても教育者としても充実した日々を過ごしていた。このトルコ時代のタウトについて、関連する先行研究を紹介しながら、どのような観点から検討を試みるべきかを考えたい。

タウトは、1908年にベルリンで開業して以来、第1次世界大戦前は田園都市、大戦前後は表現主義（心で思ったことをそのまま表現する芸術の潮流）へとその立脚点を変化させ、1920年代後半にはモダニズム建築によるジードルング（住宅地）建設により国際的に高く評価された。モダニズム建築とは、石、レンガ、木を建材とする装飾の多い従来の建築に対して、鉄筋コンクリートやガラスを用いた直線的・合理的な設計による建物のあり方を指す。この時期のタウトのジードルングは、主に1924年設立のGEHAG（公益的住宅・貯蓄・建築株式会社 Gemeinnützige Heimstätten-, Spar- und Bau-Aktiengesellschaft）によって建てられた。馬蹄形ジードルングや森のジードルングといった2千戸規模のジードルングが代表的なものだが、日本やトルコに亡命した時には、そうしたモダニズム建築の建築家と認識されていた。

トルコへのタウトの関わりは、第1次世界大戦中の、ドイツ・トルコ友好会館のコンペへの参加にさかのぼる。その後、トルコは、大戦の敗北とセーブル条約、ケマルパシャ主導のトルコ共和国の建国と連合国とのローザンヌ条約の締結（1923年）といった政治的激動をへて、広大な領土をもつ多民族国家オスマンから、小アジア中心のトルコ人の国家、トルコ共和国へと変貌を遂げる。

タウトが、この新しい国家に積極的に関わるようになったのは、建国後10年以上がたってからということになる。タウトは、イスタンブールの芸術アカデミーの教授となる。これは、オーストリアで活動していた建築家エルンスト・アルノルト・エクリ（1893-1974）が付いていたポストであるが、エクリがスイスに移ったため後任にドイツの建築家ハンス・ペルツィヒが任命されたものの、ペルツィヒが赴任の途中逝去した。そこで、タウトに白羽の矢がたてられたのである。タウトは、また文部省の建築局のために働いている。

イスタンブールには、1920年代後半にタウトとともに都市建築顧問官としてベルリンの住宅建設を推進したマルティン・ヴァーグナーが、市の建築顧問として活動しており、この都市は、タウトにとってはまったく知らない人ばかりの世界であったわけではない。もっともヴァーグナーは、タウトが到着した翌年には、グロピウスの要請でハーバート大学の

教授職に就任しており、イスタンブルに 1920 年代後半のベルリンの状況が再現されたわけではなかった。他にも、タウトはドイツ本国からかつての協力者を自分のスタッフとして呼び寄せている。エクリ時代のスタッフも残っており、彼らが新任のタウトに対して抵抗感をいだいたために自分の考えを理解してもらえ人間でわきを固めようとしたのである。1914 年以来建築事務所タウト&ホフマンで働いていた H.グリムや GEHAG で協力関係にあった F.ヒリンガーは、タウト到着後半年の 1937 年の 5 月 25 日と 7 月 8 日にそれぞれイスタンブルに来ている。他方、1920 年代のベルリンで建築家としての修業をしていたヴァルター・シーガル（1907-1985）やマクデブルク時代の協力者カール・クライル（1890-1847）の招聘は実現しなかった。このように十分なものとはいえないかもしれないが、ドイツからスタッフを呼び寄せるわけにもいかず、ドイツ語や英語を介するわずかな人間を通じて工芸の指導を行っていた日本よりも、建築家として活動するためにはるかに恵まれた状況を作り出すことができたといえる。

タウトがイスタンブル時代に設計したのは、本国ドイツでのような大規模ジードルングではなく、学校関係の公共建築が中心である。これらは文部省の建築局がらみの仕事であろう。戦後アンカラ大学に統合される言語・歴史・地理学校の校舎、中等教育ではトラブゾンの男子高等学校がその例としてあげられる。他にトルコにおけるタウトの建築において特徴的な仕事は、1938 年 11 月 10 日に亡くなったアタチュルクの葬儀（11 月 21 日）の祭壇の設計、そして自宅である。前者は、棺の周りを高い 6 本の柱で囲み、柱の上にはたいまつがたかれる。柱相互も直線的な壁あるいは幕でつながれる。棺の上にはトルコ国旗が掲げられる。全体的に装飾を排した、タウトなりの祭壇のモダニズム的解釈というべきものである。後者は、八角形の建物に三層の屋根がつけられたものである。屋根を多層にするのは、タウトの設計した建物でもはじめてである。ここには明らかに、五重塔など日本建築の影響がうかがえる。斜面に建てられ、主たる構造物の下に地下室の空間が設けられているのは、熱海の断崖絶壁にある日向邸の地下室の改造を想起させる。様々なデザインも取り込んでいく融通無碍さは、タウトの特徴といえる。

建築物以外で重要なのは、最後の著作『タウト建築論講義』が、1938 年に刊行されたことであろう¹。当時トルコの大学に職を得ていた亡命ドイツ人は、大学の授業のための教科書を執筆することが条件づけられていたが、『建築論講義』もそのためのものである²。教科書にとどまらず、タウトの建築論の集大成としても評価できるものである。

さて、筆者は、前稿³においてドイツと日本におけるタウト研究の動向を整理し、タウト

¹ トルコ語版 *Mimari biligisi, tercüme eden Adonan Kolatan*, Istanbul, Güzel Sanatlar Akademisi, 1938; 日本語版『建築芸術論』（篠田英雄訳）、岩波書店、1948 年；ドイツ語版 *Architekturlehre. Grundlagen, Theorie und Kritik, Beziehung zu den anderen Künsten und zur Gesellschaft*, Hamburg 1977. トルコ語版の底本となったドイツ語版からの翻訳として、『タウト建築論講義』（沢良子監訳・落合桃子訳）、鹿島出版会、2015 年が出版された。

² 当時トルコに亡命していたドイツ人の状況については、藤本健夫『ドイツ自由主義経済学の生誕——レブケと第 3 の道』ミネルヴァ書房、2008 年、第 6 章参照。

³ 拙稿「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」『史林』100-3、2017 年。

研究の今後の方向性は、日本とドイツ、さらにはトルコや、1932年から1年間滞在したソ連における活動を、それぞれの社会の歴史的背景やタウト研究の動向をもふまえて、異文化を渡り歩いた人物としてタウトを総括的にとらえていくものになることを指摘した。その際、ソ連とトルコにおけるタウトについては、準備の都合から十分にふれることができなかった。本稿では、トルコのタウトについて検討したい。ただし、筆者の言語能力からトルコ語で書かれた文献はフォローできていないことをあらかじめのべておく。

前稿においてタウトに関する研究者の関心は、ドイツと日本において1990年代以降高まったことをのべたが、トルコにおけるタウトへの関心もほぼ同時期からみられるようになる。タウトの活動の全体像を日本とドイツにおいてはじめてバランスよく紹介したのは、1994年から95年にかけて日本とドイツで開催されたタウト展である。その時にトルコにおけるタウトの建築についても、簡単なが紹介された⁴。このタウト展にかかわったアーヘン工科大学のマンプレート・シュパイデルも寄稿して、トルコで出版されたのが『アタチュルクを記念する』（1998年）である⁵。これは、1938年に亡くなったアタチュルクを記念するための施設、葬儀の際の祭壇と廟に関する展覧会を書籍化したものであり、その施設のうち前者をタウトが設計した。トルコ語、英語、ドイツ語の3言語併記で出版されたこの書物により、トルコ滞在期のタウトの建築、教育活動、スタッフなどについて基本的な情報が、簡単であるが、整理された。日本においても、1998年に沢良子がアンカラ大学の校舎をとりあげている⁶。

これらの業績は基礎的な情報の整理である。その点、トルコ時代のタウトの建築にかかわる著作がドイツで刊行予定であるのは重要であろう。これには、ベルリンやマクデブルクのタウト建築について資料研究に基づいた総覧の試みを出版してきたブレンネもかかわっており、トルコにおけるタウトに関する今後の研究の基礎となるはずである⁷。

タウトにかんするトルコ人によるまとまった研究としては、イスタンブールのBahçeşehir大学の准教授ドンダルによる英語の著作を参照しただけである⁸。これは、京都大学に提出した博士論文を刊行したものである。ドンダルは、タウトの思想の時代ごとの発展を探究する必要性を指摘しており、そのうち本書は日本におけるタウトの思想に焦点を合わせている。今後、前稿で指摘したように、タウト思想の様々な文化の中の変遷が議論の対象

⁴ 図録として『ブルーノ・タウト 1880-1938 Nature and fantasy』トレヴィル、1994年; *Bruno Taut - Natur und Phantasie*, Ernst, Wilhelm & Sohn 1995 が出版されている。

⁵ *Atatürk için düşünmek : iki eser: Kâtafalk ve Anıtkabir : iki mimar: Bruno Taut ve Emin Onat = Für Atatürk gedacht = Thinking for Atatürk*, İstanbul 1998.

⁶ 沢良子「ブルーノ・タウトの亡命期の建築について——アンカラ大学文学部校舎を中心に」『鹿島美術財団年報』16別冊、1998年。

⁷ Winfried Brenne, Deutscher Werkbund Berlin (Hg.), *Building in Exile. Bruno Taut: Turkey 1936-1938*, niggl Verlag 2018. ベルリンについては Deutscher Werkbund Berlin e.V. (Hg.), *Bruno Taut. Meister des farbigen Bauens in Berlin*, Berlin 2005、マクデブルクについては Winfried Brenne, Viola Beil, Thomas Krayl, *Gartenstadt-Kolonie Reform*, Magdeburg 1995 がある。

⁸ Murat Dündar, *A study on Bruno Taut's way of thought. Taut's philosophy of architecture*, LAP Lambert Academic Publishing, 2011.

となると考えられ、そうした方向性の中で意義をもちえる研究と評価できる。このように国際的にも評価すべき業績であるが、トルコにおけるタウト研究の基礎を築いたものとも位置付けられる。

では、トルコにおけるタウトの活動をどのようなコンテキストの中で位置づけるべきか？

まず、トルコ共和国の近代化の中のタウトの位置について検討したい。第1次世界大戦の敗北とトルコ革命を経て新しく誕生したトルコ共和国には、多民族国家であった時代とは異なる新たな「トルコ」民族を作り出す必要があった。その際に重要視されたのが、文字革命に代表されるような西欧化、そして社会の中からイスラム教色を排する世俗化であった⁹。

そうしたトルコ民族主義の確立に果たしたモダニズム建築の役割を検討したのが、Sibel Bozdoğan の著作『モダニズムと民族形成——共和国初期のトルコ建築文化』（2001年）である¹⁰。本書では、オスマン帝国時代とは異なる国民統合を目指すために、建築様式として当時欧米で大きな影響力を持ち始めたモダニズム建築を導入したことが分析されている。

本書によると、新国家にふさわしいものとして鉄筋コンクリートによる直線的な建物が用いられたという。建国直後はまだ、オスマン以来の伝統的な建築をも援用したモダニズム建築が建てられた。たとえば、伝統的な住宅では、2階より上が1階よりも道路のほうにせり出しているが、1920年代のモダニズム建築ではそうした要素がまだとりいれられていた。1930年代になると、欧米流のモダニズム建築に徹した設計の建物が建てられるようになる。それを支えたのが、トルコに招聘された外国人建築家である。とくに、ナチス政権が誕生し、亡命をよぎなくされた、ドイツ人やオーストリア人が果たした役割が大きい。彼らは、建物の設計だけではなく、建築家教育にも従事することが求められ、専門職としての建築家を養成することが期待された。建築物だけではなく、住宅における生活スタイルも、部屋ごとの機能分離、あるいは部屋や家具の合理的な配置など、当時の欧米風のもものが紹介されるようになる。1930年代後半になると、トルコ独自の文化への回帰の動きもみられるようになる。

以上の Bozdoğan の研究においてもタウトの活動は参照されているが、改めて彼女の議論をふまえてタウトのトルコにおける活動を検討したい。タウトがトルコに到着した1936年は、モダニズム建築導入の動きがほぼ定着した時期といえる。タウトも、モダニズム建築による大学の学舎や高等学校を設計している。彼は、イスタンブール芸術アカデミーの教授として教育に従事し、また最後の著作も大学のテキストとして執筆されたものである。タウトも新たな「トルコ」民族創設の一翼を担わされたというべきであろう。

⁹ 新井政美編『イスラムと近代化——共和国トルコの苦悩』講談社選書メチエ、2013年。

¹⁰ Sibel Bozdoğan, *Modernism and nation building. Turkish architectural culture in the early Republic*, University of Washington Press 2001.

他方、Bozdoğan は、『建築論講義』において土地独自の建築のあり方を尊重するように求めている点にトルコ独自の建築のあり方の復興の動きを見て取っている。これに加え、彼の最後の作品である自宅は、彼の「アジア」理解が前面に出たものであり、建材や様式の点で普遍的な方向性を目指すモダニズム建築とは傾向が異なる。これらの点については、融通無碍に周囲のものを取り入れていくタウトのもともとの姿勢を反映した側面もあり、最終的な評価のためにはタウトの活動全体のなかでのトルコ時代の位置づけの明確化や『建築論講義』におけるトルコの影響についてより詳細に検討する必要があるだろう。

次に、タウトの本領は住宅建設にあった。ドイツ本国にいた際にも、公共建築は、建築事務所を共同経営していた弟のマックス・タウトが主に担当し、タウトの仕事の中心は住宅建設にあった。トルコにおいては、自宅以外は住宅の設計は行っておらず学校建築が中心である。これは、近代化を進める中で新しい「トルコ」を教育を通じて創設するのが急務であり、タウトのような外来の建築家に求められたのが、学校建築などの公共建築であったという事情が想定できよう。この点にも、タウトがトルコの近代化の過程の中に組み込まれた存在であることが示されている。

とはいえ、トルコでもモダニズム建築による集合住宅や一戸建ての事例は着実にみられ、モダニズム建築受容の動きは、すくなくともイスタンブルやアンカラでは確実に存在したといえる。タウトの活動が住宅建設方面に向かわなかった背景を理解するには、19世紀以来のトルコ都市史の展開を考慮に入れる必要がある。民衆や中間層の居住の実際や都市空間の発展史をはじめ、上下水道、電気、ガス、公共交通機関といったライフラインの整備の過程についての情報をふまえて、モダニズム建築による住宅建設の可能性がどの程度存在したのか把握できる。ライフラインの整備は、モダニズムによる複数階の集合住宅の前提といえる。モダニズム建築の可能性を了解してはじめて、トルコにおいてタウトが住宅建設に従事しなかった意味がより明確になるはずである。

最後に、「ヨーロッパ」と「アジア」の問題がある。古来様々な文化が交流してきたイスタンブル・トルコを二項対立的にとらえるつもりはない。ここで問題としたいのは、タウトにとってのイスタンブルやトルコが、この二つの世界のどこに位置付けられるかである。イスタンブルとトルコは、宗教的にはイスラム教であることをはじめ、ヨーロッパとは異なった伝統に建つ国家であることもまちがいないので、タウトにとって「アジア」あるいは「非ヨーロッパ」と感じられた要素があったことも想定できよう。

他方、タウトは、イスタンブルには、ヨーロッパ都市、とくにベルリンとの類似性を十分感じたであろうことを指摘したい。第1に、イスタンブルは、いうまでもなくボスボラス海峡とマルマラ海に面した「水辺の街」である。ベルリンも、内陸の都市であるものの、周辺に多くの湖を抱えた「水辺の街」である。第2に、イスタンブルでは、ボスボラス海峡が市内交通の要路であり、それが市内の宮殿や離宮を連絡する役割をはしていた。これが、都市の構造の軸の一つを形成している。ベルリンにおいても、ポツダムやシャルロッテンブルクといった宮殿の所在地とベルリンを結ぶ広い街道が、街の構造に影響をあたえ

ていた。イスタンブルにおいてもベルリンにおいても、19 世紀後半以降の裕福な階層の邸宅が建てられるようになったのはこうした要路沿いなのである。第 3 に、1273 年にジェノヴァ人の居留地となって以来ヨーロッパ人の居住の地として発展したガラダ地区では、とくに 19 世紀後半以降、同時代のヨーロッパ風の街並みが形成された。まったく気候風土から異なる日本からイスタンブルに到来したタウトにとって、イスタンブルは「ヨーロッパ」の雰囲気を感じさせるものであったろう。

しかも、彼はドイツから協力者を呼び寄せ、ドイツ時代に近い形で設計に取り組むことができた。この点も、極東の島国に知人を呼び寄せることのかなわなかった日本時代との大きな相違である。タウトにとって、イスタンブルは、さしあたっては「ヨーロッパ」に戻ってきたという感慨をいだかせるに十分な状況はそろっていたといえる。

タウトにとってイスタンブル・トルコが「ヨーロッパ」と「アジア」の間でどのように位置づけられるか複眼的にとらえる必要がある。

(大阪市立大学教授)